

## 江戸時代人の見た富士-3

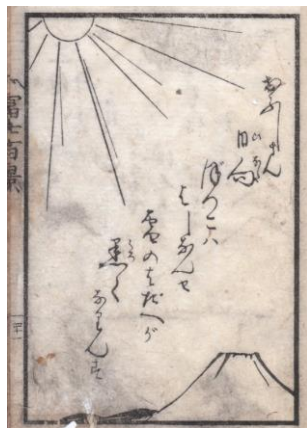
石川 博 (甲府クラブ)



### 江戸時代人の見た富士 その9

今回は、実際の富士ではなく、比喻などの修辞に使われた「富士」をみたい。まず、大きいことを富士でたとえる例をいくつか。井原西鶴は「富士山ほどの金持ち」と記し、十返舎一九は「借金は富士の山ほど」と書く。いずれも金額の大きさを富士でたとえたもの。また、近松門左衛門の「富士も及ばぬ恋の山」という表現は、和歌にもしばしば使われ、定型化していた。これは、恋の障害が富士山より大きくて、とても越えられない、という意味だ。「富士よりもその名高き」と平賀源内が書いているが、これは有名なものの代表として富士を用いている。

「富士の山ほど願ってすり鉢ほどかなう」ということわざもある。これは、大きいものと小さいものの対比。



「富士は白うて、お月さんは丸い」というのは、当たり前、という意味で、富士と言えば雪の白さがイメージされたのだ。そこから「富士よりも白い肌」という表現も生まれた。「お富士さん雲の衣を脱がしゃんせ雪の肌へが見たうござんす」(詠み人知らず、「万載狂歌集」という狂歌もよく知られていた。それをもじった狂歌もある。

「お富士さん日向ぼっこはよしなんせ雪の肌へが黒くなりんす」(富士百景狂歌集、右の図)というものだ。狂歌をもじって狂歌を詠む、というほど江戸の文化は爛熟していた。

さて、クイズです。横井也有の「鶉衣<sup>うずらころも</sup>」という俳文には、「まるで、原・吉原を駕籠に乗って富士を眺めるようだ」という意味の文がありますが、これはく何をたとえたものでしょう。ヒントは「生き物」です。……答えは「カニ」。駿河の原・吉原あたりでは富士が街道の横に見えますから、まるで、横歩きをしているようだ、というのです。

(甲府クラブブリテン:2012年3月号)

### 江戸時代人の見た富士 その10

平清盛と同じ年に生まれた西行は、出家した後全国を行脚したと言われ、各地に伝説を残している。山梨県南部町にも西行という地名があり、二種類の伝説が語られる。一つは、地

元の子どもが難解な歌を詠んだのを聞いて、とんでもないところに来てしまった、と驚くというもの。実は方言だったというオチ。これは全国に同様な伝説がある。

もう一つが富士に関するもので、「風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我が思ひかな」という歌を峠で詠んだというもの。この



歌は西行の代表作の一つでもあり、「新古今集」を代表する歌でもある。詞書には「あづまの方へ修行しはべりけるに、富士の山をみて」とあるだけで、具体的な地名は記されていない。しかし、現在南部町の西行峠には、公園が整備され、この歌を刻んだ碑が建てられている。また、西行がこの歌を詠んだ場面はしばしば絵に描かれ、「富士見西行」と呼ばれている。富士に向かう西行を後ろ姿で描くことが多いが、ここに挙げたのは北斎の柱絵（細長い絵）で、西行が振り返る構図になっている。この絵は、ホノルル美術館から里帰りして、5月には三井記念美術館で公開されるという。

（甲府クラブブリテン:2012年4月号）

## 江戸時代人の見た富士 その11

江戸時代、富士山に登ることは信仰のためであったが、次第に観光の側面も現れてくる。本来は富士講という名目で男性のみが登山したのだが、登ってみたいと思う女性も次第に増えた。原采蘋という女流詩人には、夢の中で富士に登ったことを詠んだ作品があるが、男装して実際に登ったのではないか、という説もある。ただ、60年に一回めぐってくる庚申の年には女性も富士登山が許される、と言われており、幕末の庚申年（万延元年＝1860）には、男女ともたいへんな富士登山ブームになった。

一方、江戸を中心に数百もの「富士塚」が築かれ、実際の富士登山の代わりに手軽に登ることができた。典型的な富士塚は、

高さ数メートル、頂上には奥宮がある。中には溶岩を置いたり、麓に人穴を設けたりするなど、実際の富士を模したものもある。とりわけ浅草、駒込、高田の富士塚は有名だった。「浅草の富士もぬけ穴一つあり」、「江戸の富士夕べに立って朝帰り」という川柳は、浅草の富士へ参詣するという名目で近所の吉原遊郭で一

晩遊んだことを詠んでいる。「清姫を引提げてくる富士土産」の「清姫」は蛇のこと。富士塚のお祭



りは6月1日で、藁で作った蛇が名物だった。（写真は駒込富士）

甲府にも富士塚がある。一つは玉諸小の北で、元は古墳だったらしいが、いつからか頂上に祠が祀られ、富士塚と唱えられている。高さ約3メートル。もう一つは小瀬団地の脇にあり、石の祠に「富士塚」と彫られているが、塚そのものはない。ちなみにこの小瀬からは、御坂山系に遮られて、ぎりぎり本物の富士が見えない。探せば他にも身近に富士塚が現存するかもしれない。

（甲府クラブブリテン:2012年5月号）

## 江戸時代人の見た富士 その12

富士山の世界遺産登録への妨げの一つが、環境問題とも言われている。多くのごみや裾野の演習場なども含め、世界遺産にふさわしいのか、との議論がある。江戸時代にも登山

者は多かった。文化13年(1816)に記された「<sup>かくそうろく</sup>隔搔録」には、地元の人言葉として「富士山は下から形だけを御覧なさい、上へ登ると糞だらけで汚い山だ」と記されている。なお、同書は「富士山百科」とも言うべき内容で、吉田口からは平均して毎年8,000人が登ること、農鳥のこと、宝永4年(1707)の噴火の様子など、様々な富士山に関する情報が記されていて興味深い。賀茂季鷹は寛政2年(1790)の富士登山の経験を「富士日記」として記している。7月なのに山小屋は寒く、十人ほどが泊っているが、蚤に苦しめられたという描写がある。近世も後期になるとかなりリアリティをもって富士山が描かれるようになったのである。

1年前、第一回を書いていた時には調査途上であったが、その後、「近世文学と富士山」についてまとめ、山梨県教育委員会がこの3月に発行した「山梨県富士山総合学術調査研究報告書」に掲載されている。本書は一般販売されていないが、現在、ダイジェスト版を編集しており、こちらは、どこかでお目に触れるかもしれない。

(甲府クラブブリテン:2012年6月号)